

概要

子供の成長を支える美術教育の実践
 ～「マイ・イソップ物語」の制作と鑑賞活動から～

子供たちの作品を大切にしたいと思う。作品には成長途上にある子供の感性や知恵が息づき、発想し、構想してつくりだす力は、これからの生活を楽しく豊かに創造する態度として、自分自身を支え、さらに作品は「成長の記録」でもあると考えるからだ。

こうした思いから、題材の開発と授業を重ねてきたのが「マイ・イソップ物語」の実践研究である。指導は事前の活動として、朝読書で「イソップ物語」の読み聞かせから始めた。奴隷であったイソップは困難にあっても、考え、表現する力で生き抜き、その寓話と教訓は「イソップの知恵」であることを伝え、「自分のイソップ物語」をつくることを提案し授業につなげた。まず、「物語づくり」と「登場人物等の設定」、まとの「教訓」を考え、次に物語の展開を「起・承・転・結」の4場面を絵と文で構成し表現することを共通課題とした。さらに、裏表紙には友達の感想を記入する欄を設け、互いに読みあい感想を記入

する鑑賞活動も取り入れた。友達や家族からのコメントで評価され承認されることは、自己肯定感の向上とともに、他者理解を深めて良好な関係づくりに寄与した。

校長職となり、この実践を「卒業記念制作」の授業として実施した。また、従前の活動に加え、8年後に成人式を迎える自分に対する「お祝いメッセージ」や、鑑賞活動も担任教師や家族にも参加してもらうなどして卒業を祝うものとした。作品は校長室で保管し、成人式に12歳を生きていた自分の意識と知恵の記録をプレゼントする趣向とした。

8年後、くしくも成人式を主宰する教育長として子供たちと対面した。成長した子供たちと再会し「マイ・イソップ物語」を手渡すことができたのは教師冥利であった。

本研究は、20年間に渡る「題材の開発」と「指導の具体」、また子供たちの意識から生まれる表現活動を通じた「成長を支える美術教育」の実践について報告するものである。



うしおぎ くに お
 潮木 邦雄

勤務先：静岡県函南町教育委員会
 出身校：兵庫教育大学大学院

1 教育研究実践のねらい

(1) 子供たちの日々の生活から

現在、子供たちの家庭や学校での生活状況は、一人親や貧困、虐待、不登校やいじめ、さらには発達障害や問題行動等、多様化し、複雑化し、指導は困難化している。

こうした中にあっても、子供たちは元気に生活を楽しみ、喜びを得て成長の糧としている一方で、不安や悩みを抱えて生活していることも事実である。

平成21年度から、函南小学校で卒業する6年生で実施してきた卒業記念制作の「マイ・インソップ物語」の授業の中で、「太陽と月」の物語をつくったA子さんは、8年後の成人式の日に向けた「お祝いメッセージ」の頁に、次のように書いていた。

「祝成人、二十歳の私へ 元気に成人式を迎えられましたか？ 12歳の私は今家族のことで悩んでいます。成人式を迎えたあなたは、どんな悩みがあるの？ 私は、今、すごく悩んでこれを書いていきます。大切な友達はいませんか？ いくらがんばっても大切な友達がいないと人生は楽しめない!? これからも、今の私と、成人式を迎えた私と、どのように変わったか楽しみます」

この児童の両親は、子供が小学校卒業後、離婚することになっており、女子児童が自分では解決できない悩みを抱えていたことを後から知った。

そして、文末は「立派な大人になれよ！ by 12歳の私」と結ばれていた。

子供たちは学校生活においても、孤立を恐

れ、友達との関係に不安を覚え、時に「いさかい」を起こしたり、「いじめ」を心配したり、悩み苦しむ姿も見られる。

こうした子供たちが、自分と向き合い、自分についての理解を深め、よりよい自分の「在り方」や「他者とよりよく生きる」ための「自分づくり」を支援する教育を実践したいと考え続けてきた。

(2) 教育研究実践の仮説として

心理臨床の専門家、河合隼雄さんはその著作で「人間は自分の経験したことを、自分のものにする、あるいは自分の心に収めるには、その経験を自分の世界観や人生観のなかにうまく組み込む必要がある。その作業はすなわち、その経験を自分に納得のゆく物語にすること、そこに筋道を見出すことになる。筋があることが、物語の特徴である……、ただ事実を述べているように思っている、それが治療者の心の中に納まる道筋をもっているという点で、それは知らず知らずのうちに、ストーリー・テリングになっっているのだ。」と語る。

さらに、「心理療法というのは、来談された人が自分にふさわしい物語をつくりあげていくのを援助する仕事だ、という言い方も可能のように思えてくる。」とも述べている。

こうした考えに基づくカウンセリング等心理療法の考え方（方法）は、その他の教育場面でも広く適用できるものであろう。とりわけ図画工作科においては、表現が中心な活動であることから、題材設定をして「自分の物語」をつくる活動をすれば、子供たちは、

自分の不安や悩みを見つめて自己理解を深め、自分に「納得のいく物語づくり」の中でそれを克服し、自らの「育ち」と「成長」につなげられると考えた。

そこで、次のような子供の「育ち」を支援する「仮説」を立てた。

- ① 子供は日々の生活を楽しみ、また喜び、時に、不安になったり、悩んだり、苦しんだりする体験を重ねながら成長している
- ② 自分の体験や状況をもとに「物語づくり」をすれば、子供は自分の意識や問題に気づき、自分らしい「在り方」や「よりよい生き方」を考えることができる
- ③ 不安や悩みを、物語の中で自分の納得のいくように表現することができれば、辛い体験なども心の中に収めることができ、子供の成長を支えることができる

(3) 自分を見つめ、成長を支える美術教育をめざして

図画工作科は、上記「仮説」をもとに、子供が自分の物語をつくり表現する授業として最適であると考え、題材開発に取り組んだ。「物語づくり」は簡潔なプロットと表現、強いメッセージ力を持つ「インソップ物語」をモデルにした。

- 題材の学習活動を構成する内容としては、
- ① 自分の体験から「感じていること」、「考えたこと」をもとにして物語をつくる
 - ② 題名を決め、物語をつくり、「起・承・転・結」の4枚の絵と文で構成する
 - ③ 登場人物は物語にふさわしい「主役」や「わき役」などキャラクターを工夫する

④ 物語のおわりには、まとめとしての「教訓」を書く

⑤ 裏表紙には友達や家族などに感想を書いてもらう欄をデザインする

等を考えて。

以上を提示して授業実践に臨み、子供たちの日々の生活から生まれてくる問題や意識が物語として語られ、表現活動において意識的、あるいは無意識に行われる自分との対話から、自己への気づきや理解が深まり、自分なりに現実を受容していく過程が見られるだろうと予想した。さらに、「教訓」には体験から得た「知恵・認識」や「生きる姿勢」が、子供なりの「世界観や人生観」として表現されることを期待した。

また、鑑賞活動として友達の作品を互いに読み合い、感想のコメントを書き、評価し合う交流活動は、互いの良さを認めあうもので「友情・信頼」や「家族愛」を深め、自身の「自己肯定感」の向上につながることも企図したものである。

こうした授業が「子供たちの成長を支える教育」としてめざした実践である。

2 教育研究実践等の経過

(1) 平成6年度～平成8年度

(大仁町立大仁北小学校勤務)

担任外の教諭(研修主任)として図画工作の授業を担当。5年生で、4コマの絵の構成による自分の物語づくり、「私のイソップ物語」を題材名として題材開発を行い、子供たちとともに楽しく授業実践に取り組んだ(図1)。

(2) 平成9年度～平成11年度
(戸田村立戸田小学校勤務)

教頭として、図画工作の授業を担当。5年生で大仁北小学校と同様の授業実践を行う。鑑賞活動を改善し、友達や家族など感想を記入し合う交流活動を充実させた。

(3) 平成15年度～平成16年度
(函南町立丹那小学校勤務)

校長として、卒業を控えた6年生に卒業記念授業として「イソップ物語」の授業実践を行う。鑑賞活動の一環として友達や家族に加え、教職員も感想を書く活動に参加した。また、8年後の自分に宛てた「成人式お祝いメッセージ」を記載するページも設定した。作品は校長室で預かり保管して、代表者が事前に

受け取りに来て、成人式当日に配布することとした。12歳の自分の作品を鑑賞しながら、自身の「お祝いの言葉」を受けられるようセットしたものである。

(4) 平成20年度～平成22年度
(函南町立函南小学校勤務)

校長職で3年間、「卒業記念、マイ・イソップ物語」の授業実践を行い、卒業式の「式辞」でも取り上げ、子供たちが抱える問題や意識に対する「12歳の知恵」を、「成長」や「生きる姿勢」と「決意」の物語として披露し、卒業を祝福した(図2)。

(5) 平成27年度～平成30年度

(函南教育委員会勤務)

教育長として、成人式の主催者挨拶のなかで、小学校卒業記念「マイ・イソップ物語」を制作したことにふれ、「二十歳の自分へ贈るお祝いメッセージ」から数名分を引用し、参加者全員の前で紹介して成長を祝った。

成人式終了後には、当時の担任やクラスメイトから、一人一人に「マイ・イソップ物語」が手渡され、12歳の自分と対面していた。

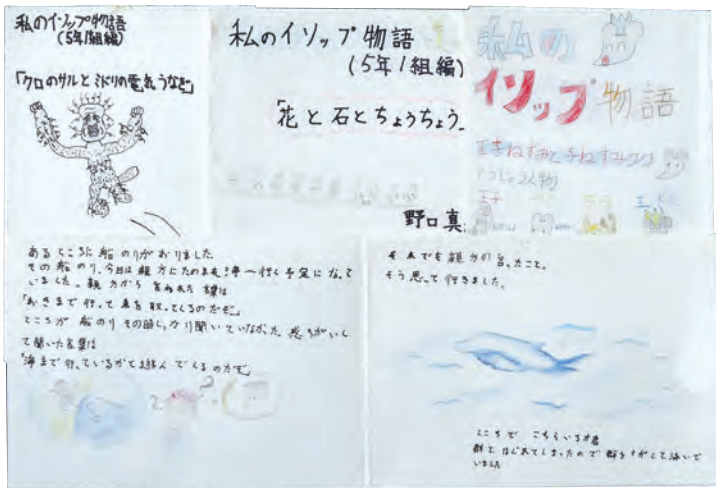


図1 最初の実践作品



図2 平成22年度卒業生の作品

なお、「マイ・イソップ物語」の中には、私のお祝いの言葉を記載した、返信用ハガキを添えて、感想等を教えて欲しいと依頼した。期せずして、卒業と退職から8年後に子供たちと再会することとなったが、平成31年1月の成人式をもって、全ての「マイ・イソップ物語」を返還することになり、私の意図した子供たちの成長を支え、励ます教育の研究実践は終了する。

3 「自分の物語」をつくる表現活動の実践

(1) 題材の構想（指導計画 5時間）

小学校6年間の生活から「自分の物語」をつくる（表1）

(2) 物語づくりと表現の具体

平成22年度、99人の作品から、表現内容として共通した傾向を持つものから、3つの作品を抽出して、表現の具体と子供の姿を明らかにしていきたい。

① 作品事例1 「キツツキとカラス」

男子児童Bさん（図3・32ページ）

【場面1】 明日から楽しい夏休みです。しかし、学校から宿題がたくさんできています。キツツキは夏休みの計画をたてました。でも、友達のカラスは遊ぶことは考えていません。

【場面2】 夏休みがはじまりました。カラスは朝からキツツキの所へ行きました。

（カ）「キツツキくん遊ぼうよ」

	学習の活動	実践上の留意点
事前の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○「イソップ物語」を楽しむ <ul style="list-style-type: none"> ・物語を聞いて感想等を発表する ・物語に教訓があることが分かる ・イソップの時代とその生涯を知る ○自分の物語を創る意欲を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝読書の時間を活用し、読み聞かせを行う（15分×4回を実施） ・イソップ物語の構造を知る ・イソップは困難な境遇を自分の「知恵」で生き抜いたことを知る
1	<ul style="list-style-type: none"> ○「マイ・イソップ物語」を表現する「イソップ・ブック」をつくる <ul style="list-style-type: none"> ・画用紙を折り、描画面づくりをする <表> P1 物語：第1場面「起」 P2 物語：第2場面「承」 P3 物語：第3場面「転」 P4 物語：第4場面「結」 P5 物語の「教訓」 <裏> P1 表紙 P2 友達からの感想メッセージ P3 家族からの感想メッセージ P4 成人式へお祝いメッセージ P5 作者紹介 	<ul style="list-style-type: none"> ・四つ切画用紙、横裁断1/2を折によって、片面5頁、裏表10頁ある「イソップ・ブック」をつくる ・「イソップ・ブック」に頁ごと、割り振りをして表現活動の見通し、全体構想が持てるようにする ・裏面の5頁は、フリー頁として作者や登場キャラクター紹介等で活用する
2	<ul style="list-style-type: none"> ○マイ・イソップの物語づくりをする <ul style="list-style-type: none"> ・題名や登場キャラクターを考える ・物語の筋道を4つの場面を考える ・絵と文の割付け、画面構成を考える ・まとめの「教訓」を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ・物語は自分の体験から感じたことや考えたことから発想させたい ・物語はシンプルなものがよいこと、登場するキャラクターも少なくても良いことを知らせる
3	<ul style="list-style-type: none"> ○物語を絵と文で表現して制作する <ul style="list-style-type: none"> ・大まかな下書きをする 	<ul style="list-style-type: none"> ・文と絵の画面構成は、良いものを紹介して工夫させたい
4	<ul style="list-style-type: none"> ・描画材や表現方法を決め、取り組みやすい所から始める ・物語を完成させ「教訓」をつける 	<ul style="list-style-type: none"> ・表現方法は、水彩絵の具やクーピー、カラーペンや貼り絵など、全て子供の選択にまかせる
5	<ul style="list-style-type: none"> ○成人式のお祝いメッセージを書く ○鑑賞活動として作品を互いに読み合い感想を書く 	<ul style="list-style-type: none"> ・成人した自分あてにお祝いの言葉やメッセージを記入する ・学級、学年に鑑賞交流を広げる
事後の活動	<ul style="list-style-type: none"> ○鑑賞交流活動を家庭に広げる ○8年後の成人式で、6年の担任や級友から「マイ・イソップ物語」を返してもらい、12歳の自分と対面し成長を確認する 	<ul style="list-style-type: none"> ・作品は家に持ち帰り、両親や兄弟、祖父母などからも感想やメッセージをもらう ・添えた返信用のお祝いハガキで感想等を教えて欲しいと依頼する

表1 題材の構想（函南小学校22年度の実践例から）

（キ）「カラスくん、ぼくは朝、宿題をやるんだ」「昼から遊ぼう」

（カ）「キツツキくん、夏休みは長いんだから、今やんなくても大丈夫だよ」

（キ）「そうだけど、僕はやると決めたからやるよ」

（カ）「ちつ、つまらないな」
カラスはしよんぼりしながら帰って行きました。

【場面3】 次の日も、次の日も……、朝から

カラスはやってきましたが、キツツキはさそいを断り、自分の計画通り宿題をコツコツやりました。ひまなカラスは、いたづらをしたり、大好きなキラキラ光る物を探していました。

【場面4】 そして夏休み最終日。カラスはいつものように光る物をさがしていました。

（カ）「明日は学校だ。夏休みも意外と早かったな……、あつ、宿題忘れてた」

（カ）「どうしよう……、そうだ！キツツキくん宿題を見せてもらおう」カラスは

急いでキツツキのところへ行きました。

(カ)「キツツキくん、宿題見せて」

(キ)「友達だけど、それはできないよ。きみは遊ぶことしか考えていなかったからね」

《教訓》今、楽をしている者は、そのうち痛い目にあう。

《マイ・イソップをつくって》(児童の感想)

この物語をつくって良かったと思うことは、自分をしっかり見つけることができたことです。僕は、今まで、いろいろなことで、つらいことをさげ、楽なほうに逃げていたのです。そこで、この物語の教訓を「今、楽をしている者は、そのうち痛い目にあう」にしました。これまで、僕もそのように失敗したことがあったので、この物語をつくり「楽な方に逃げないようにしよう」と改めて思えました。この本をつくって、本当に良かったと思います。

《家族の感想…メッセージ》

(兄)しっかりと目標をもって生活しろよ。

陸上は積み重ねが大事だよ。

(母)6年の冬の朝、眠くても、寒くても、星が出て暗い朝でも、朝練を頑張っていたね。辛くて、苦しくて、思うように走れなくて、悔しくて、泣いたこともたくさんあったけど、練習を重ねてきたことによつて、結果がついてきたよね。

(父)小学生ではよく泣いていたな、ほとんど毎日。泣き虫は治ったか? 強い人間になったか?

② 作品事例2

「うーたんとねこみちゃん(自分らしさ)」

女子児童Cさん(図4・32ページ)

【場面1】

ある所に、うーたんという一匹のウサギがいました。うーたんのクラスには、オシャレで人気者のねこみちゃんがいました。みんなは、ねこみちゃんみたいになりたいくて、ねこみちゃんのマネばかりしていました。

【場面2】

うーたんもその一人で、毎日ねこみちゃんのマネばかりしていました。そして、日に日に、自分らしさをなくしてしまいました。

【場面3】

そんなある日、うーたんは、幼なじみのさるお君に、「最近、うーたんは、うーたんらしくなくて、つまらないよ」と言われてしまいました。うーたんは、とてもショックでした。

【場面4】

次の日からうーたんは自分らしいオシャレをし、自分らしくふるまいました。すると、あこがれのねこみちゃんが、「うーたんは自分らしくてかわいいよ!」と、ほめてくれました。うれしくなったうーたんは、この日から、自分らしさを大切にしようと思えました。

《教訓》

人のマネばかりしないで、自分らしさを大切にしよう!!

《マイ・イソップをつくって》

私らしいマイ・イソップを考えつくったのが、自分らしさを大切にしようという話だ。このお話は、実さい私が体験したことをもとにつくった。マネばかりしていても、何の

とくもないということに、私は最近気づいたばかりだった。このことを友達に、家族に、二十歳の自分に伝えようと思った。つくっていくうちに、私は今までの自分を見つめ直すようになった。友達のマネばかりして自分らしさを無くした昔の私が、マイ・イソップの主人公として登場した。わき役の人気者も私の友達、それを気づかせてくれた友達も登場した。マイ・イソップの物語が、マイ・ストーリーになっていったのだ。私が一番うれしかったのは、「私も自分らしさを大切にしようと思った」という感想だ。「目標であった友達に昔の私を伝える」というのが叶ったからだ。マイ・イソップ物語をつくって、自分を見つめ直すことが出来てよかった。

《友達・家族の感想…メッセージ》

(友1)絵がかわいい。大好き! いやあーほんまにええ話。絵本が出来たら欲しいな

(友2)自分らしくいることは大事なんだ

ネ! 人のマネばかりしてない方がイイネー

(友3)うーたんが自分らしさに気づいて良かったと思う。自分も流行を取り入れ

ながら自分らしさを出していきたい

(友4)絵、ちょーかわいい。私も自分らしさを大切にしたいと思った。

(母)自分らしさを忘れず、人の良いところは吸収し、さらなる人としての成長を……。

③ 作品事例3 「いじわるモンスターとモンスター」男子児童Dさん(図5・32ページ)

【場面1】 ある日、いじわるモンスターが一人で遊んでいました。そこに、一人のモンスターがやってきました。

【場面2】 そのいじわるモンスターとモンスターがたたかいはじめてしまいました。

【場面3】 そして、いじわるモンスターと、モンスターが、仲良く遊び始めました。

【場面4】 いじわるモンスターとモンスターは、もう、けんかをしないとけついで、これからも仲良くくりました。

《教訓》 そのいじわるモンスターみたいに、いじわるをしないようにしていけるとよいです。

《マイ・イソップをつくって》

ぼくが思いついたのがモンスターで、題名も、ぼくがいじめをしないようにと考えて、いじわるモンスターとモンスターの物語の本をつくりました。ぼくは、いじわるを見かけたり、やられている人を見かけたら、進んで注意をして、けんかやいじめのない、平和な町や県にしたいと思いました。そして、ぼくは、イソップに、いじわるモンスターを入れました。そのモンスターは、いじわるばかりをしていて、最後には、仲良くなりました。モンスターは、とてもやさしいモンスターで、何でも手伝ってくれたりしてくれるモンスターです。6年間の中で、ぼくはいじめられたり、いじめてしまった時に、何でいじめてしまうんだろうとなやみました。だけれど、モンスターのように、けんかをしても仲良くなったけれど、けんかするほど仲が

良いから、べつにけんかをしたって何てことはないと思っていた時がありました。

そのやられた人がどんな気持ちになったのか、今では、分かるようになりました。

ぼくは、人生の中で、たった一つのマイ・イソップをつくりました。ぼくが二十歳になるまで校長室の金庫の中でねむり続けて二十歳になって、見るのが楽しみです。

《友達・家族の感想・メッセージ》

(友1) いじわるはしてはいけないよね。物語もよくできています。

(友2) モンスターがいじわるそうでした。話もおもしろかったです。

(友3) 絵が全然かわらんのがすごい。

(友4) 物語が分かりやすかったですよ。モンスターらしさがでていたよ。

(担任) 人に嫌なことをすると、自分に返ってきてしまいますね。自分はそういうふうにならないように、そして、そういう人がいた時に、優しく対応できる人になりたいですね。

(母) 今年は2011年、二十歳になるのは何年ですか？ 思い出になる作品ができてよかったですね。

(3) 物語と表現にみる子供の姿から

①「キツキとカラス」の作者、男子児童Bさんのあらわれ

Bさんは陸上競技の長距離走が得意で、校内持久走大会では毎年1位となるなど活躍を

していた。静岡県では年末に市町対抗駅伝が開催されるが、その代表として小学生、中学生、高校生としても出場し町の部での優勝や準優勝に貢献した。「マイ・イソップをつくって」の作文や「家族の感想」からは、物語や教訓にみられる「意志の強さ」や「自分への厳しさ」が、小学生の時から形成されてきたことが確認できる。

Bさんにとって、この物語は自分の「心の成長」を確かめ、これからの生き方について「決意表明」をした作品であるとも言えるだろう。

②「うーたんとねこみちゃん」自分らしさ」の作者、女子児童Cさんのあらわれ

友達が多く、快活なCさんに、物語のような葛藤があるとは想像できないことであつた。Cさんのように、「自分らしさ」や「自分の良さ」を探し求める物語は、多くの子供たちがテーマとした内容である。物語づくりを振り返った作文からは、自分の目標としていた友達に、物語を通して評価され、承認されたことで、自信を深め大きな達成感を持ったことが読み取れる。自分らしく生きることの大切さに気づき、アイデンティティの探求を始めた成長の記録を物語った表現と言えるであろう。

③「いじわるモンスターとモンスター」の作者、男子児童Dさんのあらわれ

「いじめ」や「仲間外れ」をテーマとした物語も多かった。表現や友達とのコミュニ

ケーションもあまり得意ではなかったDさんが、小学校6年間でどのように過ごしてきたのか、物語と「マイ・イソップ」をつくって」の作文を読み、胸が熱くなった。そこには、いじめたり、いじめられたりする関係の中で、悩み苦しむ、「何でいじめてしまうのか」と自問する姿があった。そして、今ではやられた人がどんな気持ちになったのか、分かるようになったと言う。物語の終わりに描かれているモンスターは笑顔で、「とてもやさしく何でも手伝ってくれる」と書いている。この姿こそ、Dさんの本質であり、自身の願う姿ではないだろうか。こうした児童理解を持った時、十分な支援と指導ができていたかと反省させられた。Dさんには、これからも自分を見つめ、よりよい在り方、生き方をして成長して欲しいと願った。

(4) 物語をつくり、表現することにより生まれたもの

3つの作品を通して、表現の具体から子供の成長する姿を読み解いてきた。小学校6年間の生活から、99人の物語が生まれ、それはほとんどが自分の体験を反映させた「ストーリー・テリング」であった。また、その物語が展開する筋道の中で、子供たちはこれまでの自分を振り返り、今の自分を見つめ、自分の「在り方」や「生き方」について、「12歳の知恵(認識)」をもって、自らを励まし、勇気づけ、決意する姿を表現していた。表現することでしか確認できなかった自分の「成長の姿」が、小学校卒業と中学校進学に向けた「はなむけ」になることを願った。

4 自己肯定感を育む鑑賞交流活動の実践

(1) 鑑賞の交流活動で育まれる「友情」、「家族愛」と「自己肯定感」

物語と教訓を描いた裏面には、友達や先生、家族の感想やメッセージを記入する欄を設け、互いに読み合い、評価し合う「鑑賞交流」を事後の活動に位置付け実施した(図6)。Eさんの作品に友達からは、「工夫がいっぱいあってスゴイ!絵が動くなんて、まるで本のびっくり箱。長所のせいで傷つくこともあるんだよね」「ヤバイ感動したよ。ほめる言葉でしか言いようがないよ」等々、多くの友達の記載があった。

また、家族からも、「あなたの頑張りにはいつも頭が下がります」「1ページ、1ページ、心を込めて作成したね。二十歳のあなたに会うのが楽しみです」「悩みがあったら何でも言うんだよ。家族だし、困った時はお互い様、ずつと味方だよ。世界でたった一人の姉より」との言葉が綴られていた。これを読んだEさんは、「私はフリーページに、友達、家族、先生に書いてもらった言葉をみて、私はみんなから愛されていて幸せ者だな、そして、みんなから、夢と生きる希望、友達、家族の大切さを、前より、もっと、もっと感じました」とまとめていた。

(2) 「卒業式」や「成人式」で、子供たちの成長を評価し新たな旅立ちを祝う

「マイ・イソップ物語」の制作が卒業記念授業であることから、卒業式「式辞」でも「物

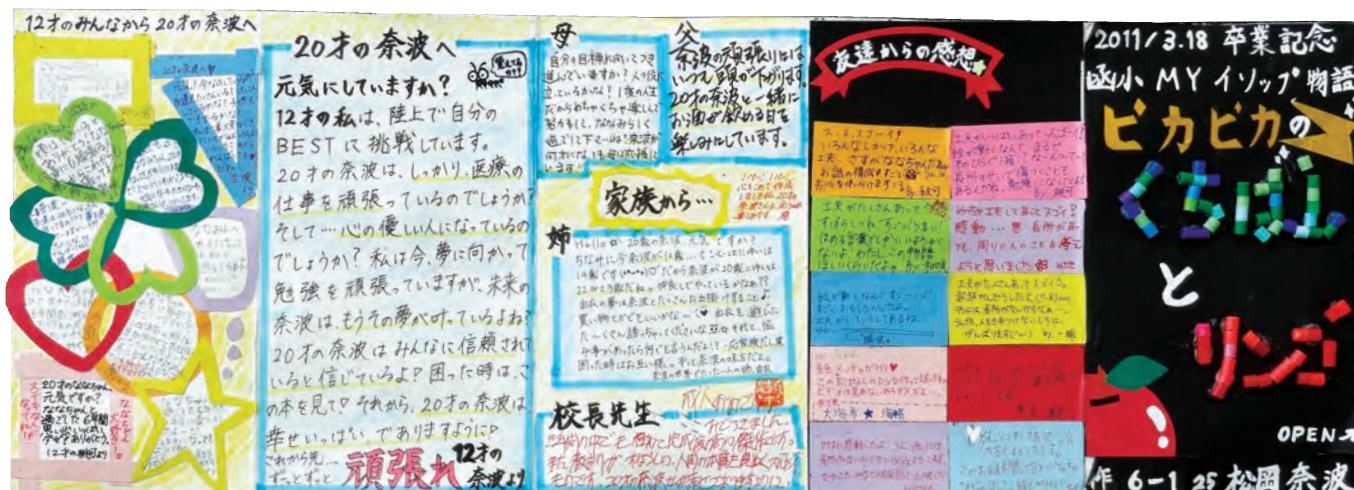


図6 鑑賞交流の感想やメッセージが書き込まれたマイ・イソップ・ブックの裏面

語と教訓」の内容を保護者の皆さんに紹介して、子供たちの確かな成長を祝福した。

また、8年後、函南町成人式の主催者である教育長として、12歳の少年が二十歳の自分に向けた「お祝いメッセージ」を引用しながら励ましの挨拶をした。

それは、「成人おめでとう。8年間無事でいてくれてありがとう」「夢って実るまで難しいよね。でも立ち上がれ、二十歳の自分」との氣遣いや励まし、また「考古学者の夢はかなっていませんか？ かなってなくてもいいよ。それが二十歳の僕が選んだ道だから」¹⁾ 未来の自分は、しっかり仕事をしていますか？ 近くの人に迷惑をかけていないよね」といった期待や不安、そして「二十歳の私は、何の夢に向かって、どんな道を歩んでいますか。二十歳の私、答えてください！」と、今を問うものなど、8年前の「思い」や「願い」を、成長した仲間と確認し合い共有する交流の場にもなった(図7)。

5 教育研究実践をふりかえって

(1) 自分の成長を確かめ「生きる力」とする

成人の日に返された「マイ・イソップ物語」の感想が返信用のハガキで届けられた。「12歳の自分がつくった物語を読んでみて、正直よく書いているなと思いました。とても短く簡単な物語でしたが、『人それぞれ個性がある。自分に合ったことを精一杯すればいい』という教訓が伝わってきました。現在、医療の勉強をしていて、充実した日々を送ることができていると改めて感じる事が出来

ました。これから更に忙しくなり、辛く厳しい日々もあると思いますが、この物語や12歳の自分からのメッセージを見て乗り越えていきたいと思えました。今回、自分がつくった物語を読み、メッセージを受けとり、改めて色々なことを考える良い機会となりました。これからは努力と感謝を大切に過ごしていこうと思います」

また、「あの時の自分が思い描く大人に成長できたか怪しいですが、まだまだ発展途上だと思えますので、当時の自分に胸を張って理想の大人になれたと言えるようこれからも精進して参ります。このような当時は振り返る機会をつくっていただきありがとうございますました」等々、二十歳の自分を見つめ直したり、さらには「12歳の自分のように夢と希望を抱いて生きたい」と、成人の決意をしたり



図7 成人式で12歳の自分と再会

する便りも多かった。

8年を経て、それぞれに成長した子供たちに出会えた。これで私の意図した教育実践は終了となるが、これからも自分を成長させ、たくましく生きて欲しいと願っている。

(2) 美術教育に願うこと

表現活動や芸術について考え始めた若い时分、「芸術のための芸術」か、「人生のための芸術」か、という忘れられない議論をした。そのことが教職に就いてからの教育観、また、指導観の形成に深く関わっている。美術教育、図画工作科にあっても、子供たちの生活や成長に貢献したいという思いは、私の一貫した指導姿勢であった。

私は美術教育が、図画工作科の目標である「つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う²⁾」ことをもって、子供たちの「生きる力」を育み、生きることを励ます教育活動であることを願う。

「子供の成長を支える美術教育の実践」と題した本報告が、美術教育の一つの在り方として、教育関係者の皆様とともに共有し合うことが出来れば幸いである。

【参考文献(引用)】

- 1 河合雄雄「物語を生きたる」小学館 2002年10月12日行
- 2 文部科学省「小学校学習指導要領(平成29年度告示)」から
図画工作第一 目標の(3)より